

2003年12月18日

人間科学研究科委員長殿

永田夏来氏の博士学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査してきましたが、2003年12月18日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

- 1：申請者氏名 永田夏来
- 2：論文題目 結婚の原理とその論理構成
- 3：本論文の要旨

現代の社会生活を貫いているいくつかの基底流のひとつは、結婚という家族形成原則にかかわる晩婚化や性の自由化のかたちをとって現れている。結婚研究は戦前から多くの領域で「何のために結婚するのか」という議論を含め、それらの成果は蓄積されてきた。改めて結婚は何に根ざしているのかを考えていくためには、これまでの議論とは異なる前提を導入したうえで、新しいパースペクティブと論理的・方法論的な展開の方向を考えていかななくてはならない。そこで本論文では、以下の3つの論点から考察をおこなっている。

その第一の論点は、結婚の現状について把握するため結婚と離婚の変遷について統計データを用いて考察し、さらに晩婚化が進行している原因として結婚モラトリアムをとりあげ、日常的なコミュニケーションについて考察する必要性を論じている。

第二の論点としては、これまでの家族社会学における結婚研究のレビューによって夫婦関係をどのようなものとして捉えていくべきかが再検討されている。戦後の夫婦関係研究は、平等な夫婦関係はどのように築かれているのか、結婚とはどのようにあるべきなのかといった関心に支えられ、多角的な視点から学際的に展開されてきた。しかしその関心は、核家族モデルがたてられたことによって夫婦の「関係」から家族の「機能」へと移行していった。家族形態や機能の変化にまつわる議論ではなく、家族についての事象をより広範かつ詳細に論じることができる新しい視点として日常的に用いている家族にまつわる言説にまで広げて分析をおこなう研究手法が認知されるようになる。とりわけインタビュー調査を用いた言説分析は、アンケート調査ではすくいとることができなかった生活上の実感や日常性を反映したデータを効果的に収集できる手法と

して普及しつつある。この手法によって、社会的な側面と個人的な側面のふたつのルールによって規定されている夫婦というカップルは、社会的な要請にこたえつつふたりの親密さを保つことを通じて、夫婦という関係を日々達成している有様を考察される。

第3の論点は、インタビュー調査をおこない、結婚という秩序がいかに構成されているかという視点から彼らの言説の分析をおこなうことである。高度経済成長期以降、恋愛を経て結婚、出産するというライフコースはほぼ定着したとされているけれども、「順番が逆」になって妊娠が先行する妊娠先行型結婚(いわゆる「できちゃった結婚」)は近年広く認知されつつある。インタビュー調査は、結婚の意味はまず夫婦の間で共有されるという前提にたち、夫婦の会話を録音したものをデータとして使用し、会話内容に注目した分析をおこなっている。妊娠先行型結婚は「愛情が先か、子どもが先か」をめくり意味付与にゆらぎがある。恋愛結婚イデオロギーと嫡出制の規範の視点から見ると、このゆらぎの振れ幅や強弱が分かる。現在の結婚は、近代家族イデオロギーによってしか正当性を獲得することができず、近代家族イデオロギーの中で近代家族が再生産されているという図式の中に自らおさまるかたちで結婚を語らざるを得ない状況を反映しているといえる。

今回のインタビュー調査によって、家族や結婚に関する意識の多様化は研究者が想定しているほど進行しているわけではない、ということがわかった。現代の日本において結婚のメカニズムを明らかにするうえで、人びとが共有している解釈装置を析出する方法論を選択、工夫することで、結婚のリアリティを事実と論理の双方をふまえて析出することが可能となると論述している。

2. 本論文の構成

本論文では、以下の3つの論点から考察をおこなっている。第1の論点としては、現代日本社会における結婚の状況を統計的に確認することである。これは「1章 現代日本社会における結婚と夫婦関係」でとりあげている。第2の論点はこれまでの家族社会学における結婚研究をレビューし、夫婦関係はどのようなものとして捉えていくべきかを再検討することである。これは、「2章 家族社会学における結婚研究と夫婦関係研究」および「3章 夫婦関係における親密性の再検討」で論じている。第3の論点はインタビュー調査をおこない、結婚という秩序がいかに構成されているかという視点から、言説に注目し「4

章 現代社会における結婚 1 妊娠先行型結婚と結婚モラトリアム」と「5章 現代社会における結婚 2 愛情が先か子どもが先か-結婚の原理とその論理構成」で論じている。

全体は「序章」に始まり論点を扱う5つの章と結論の7つのパートから構成されている。「序章」の問題点の整理を受けて「1章 現代日本社会における結婚と夫婦関係」は、恋愛を経て結婚するという結婚のスタイルは戦後定着したこと、晩婚化の原因としては恋愛スタイルの変化と経済状況の変化が考えられること、結婚の意味がしだいに希薄化していること、離婚は有責主義から破綻主義へ移行しつつあること、離婚が増加傾向にあり、その原因は愛情の不足というよりもコミュニケーションの性質にあることなどの特徴を指摘している。コミュニケーションに注目することで、結婚に対するスタンスの差異を導き出しているところが興味深い。

「2章 家族社会学における結婚研究と夫婦関係研究」は第2の論点を扱い、これまでの家族社会学における結婚研究のレビューを通じて、夫婦関係をどのようなものとして捉えていくべきかを再検討している。「3章 夫婦関係における親密性の再検討」は戦後の夫婦関係研究は、多角的な視点を持って学際的に展開されてきたが、その後それぞれの領域が専門性を深め、特化していくことによってじょじょに連帯を弱めていった。社会学の側では核家族モデルが立てられ、関心は夫婦の「関係」から家族の「機能」へと移行し、家族の機能をどのように規定するかという問題を抱え込むことになった。こうした流れの中で、家族とは何かという問いは、重要なテーマのひとつとして取り上げられはじめた。

人びとが日常的に用いている家族にまつわる言説を分析する研究手法は、従来の家族形態や機能の変化にまつわる議論ではなく、家族についての事象をより広く詳細に論じることができる新しい研究スタイルである。とりわけインタビュー調査を用いた言説分析は、社会的な側面と個人的な側面のふたつのルールによって規定されている夫婦というカップルが、社会的な要請にこたえつつふたりの親密さを保ち、夫婦という関係を日々達成している生活上の実感や日常性を反映したデータを効果的に集めることができる手法として現在普及しつつある。

第3の論点を扱う「4章 現代社会における結婚 1 妊娠先行型結婚と結婚モラトリアム」と「5章 現代社会における結婚 2 愛情が先か子どもが先か-

結婚の原理とその論理構成」は、インタビュー調査をおこない、結婚という秩序がいかに構成されているかという視点から、結婚の意味はまず夫婦の間で共有されるという前提にたち夫婦の会話の録音をデータとして使用し、会話内容に注目した分析をおこなっている。

「4章」においては、自由な恋愛を満喫しているかにみえる20代～30代の若者であっても家族役割や家族責任をかなり意識しており、そのためかえって結婚をさきのぼしていることや、妊娠先行型の結婚であってもかけがえのない相手と運命的に結婚したのだ、というロマンティックラブイデオロギーに即して結婚を位置づけている点、さらには家族の情緒的つながりやよりよい環境での子どもの養育といった近代家族イデオロギーに即した形で家族を作ろうとしている点などを明らかにしている。妊娠先行型結婚は恋愛結婚と近代家族形成というふたつの要素を兼ね備えることによってその逸脱性が隠蔽され、当事者や周囲からも肯定的な意味付与がなされている有様をとらえている。

「5章」では、現代における結婚の意味とはどのようなものとされているのかを探ることを目的としている。未婚女性による妊娠先行型結婚への意見を記述したアンケートと、それに対する妊娠先行型結婚当事者からの異義申し立てを中心とした分析をおこなっている。妊娠先行型結婚は恋愛結婚イデオロギーと嫡出制の規範との間で「愛情が先か、子どもが先か」をめぐるゆらいていることが分かった。妊娠先行型結婚の当事者は、代替不可能性、永続性、親子関係に先立つ夫婦関係の存在など独自のレトリックを使用して妊娠や子どもを関連づけて、通常の結婚と同様の意味をもつものとして位置づけている。

「結論」は日常会話のような社会的に準備された言語を通じて、人びとがプライベートな生活に秩序をあたえているという連関をふまえることによって、個人と社会の両方の側面から結婚について議論できるという視点を提示し、この議論によって、「社会的に承認された性関係であること」をはじめとした、これまで家族社会学において定説とされてきた「結婚の意味」とは違った側面から結婚についてとらえる試みが可能となり、結婚についてこれまでと異なる結婚をめぐるリアリティをすくい上げる可能性に道を拓いている。

3. 本論文の評価

本論文は、人間社会が存続する上でいぜん大きな意味をもち続けている家族を形成する「結婚の原理とその論理構成」を課題にしている。結婚はその原理

がゆらぎを見せているにもかかわらず、いぜんとして夫婦関係を形成し維持する有力な枠組みとして機能している論理を、本論文は以下に述べるような特徴によって展開している。

時代は大きく動き、その動きが諸制度の有効性を試している。本論文は、そういう転換点に際して夫婦関係の形成の先行研究を手際よく整理し、そうすることによってこれまでとはひと味違った研究方向を確保している。それは家族の「機能」の研究という茂みの中に入り込むのではなく、親子関係、役割構造、勢力関係、夫婦臨床のアプローチの研究蓄積を持ちながら、これらに距離をおいて夫婦関係という問題領域に焦点を当てることができたからである。

本論文は、夫婦関係を成り立たせている原理として、親密性に着眼し、親密性の発現形に適切な言葉をつけ、事柄や事態にふさわしい輪郭をあたえている。この点に本論文の第1の特徴がある。

夫婦関係は、この親密性によって構築されているから、夫婦関係は、意思疎通のよしあしから「コミュニケーションの目詰まり」までの間に、関係の取り方としてスポットライトを当てられている。この二者間関係は「自分自身にとってどのような表現手段が有効であるのかの判断の総体」(64ページ)を指すルールによって左右される。ルールには「自分ルール」「相手ルール」そして「カップルルール」がある。「関係性の構築とは、さまざまな表現手段の交換を喜んでり不快に思ったりしながら『自分ルール』と『相手ルール』を把握し、その均衡点を探ることである」といい良いだろう。(64ページ)と表現されている。愛情という言葉に埋め込められていた諸々の要素を「ルール」に還元して記号化し、夫婦を夫婦たらしめている愛情の内実に迫る手法を採用しているところに独自性があり、ここで取られた手法は、単に「妊娠先行型結婚」のみならず、規範と実態が乖離した場合の人間がどのように折り合いをつけるかという点をモデル化したものであり、さまざまな現象に対して無限の応用可能性を秘めている。これは本論文の第2の特徴であるといえる。

本論文は、インタビュー調査にもとづいて、結婚モラトリアムや妊娠先行型結婚の実相に迫っている。この手法は、大量観察のサンプリング調査では果たせない対象者の意識の襞のそのまた襞に分け入り、そこにあるものを読み取る試みといえる。この試みはそれなりの首尾を達成していて、インタビュー調査によって結婚は生態的に変わったといわれているにもかかわらず、ロマンティックラブイデオロギーと嫡出制の規範に支えられているゆえに、従来の結婚の

あり方と矛盾しない内実を志向していることを論証している。これは本論文の第3の特徴であり、論証力のレベルを示している。

第4の特徴は、本論文が理論と臨床を結びつける環を周到に持っているところにある。「愛—結婚—性」の三位一体の均衡がおかしくなれば、結婚秩序はゆらぎ、離婚をはじめとする夫婦関係を損なう現象が生じるだろう。本論文はこのようなクライシスに対応する論理構成を「すれちがい」「愛情の詰め込み」「コミュニケーションの目詰まり」などいくつもの巧みな造語をつくり、もう一工夫すればこれらのことばで要約されている考え方は応用可能になるレベルに上げていることである。

現代は新しい人間探究の手法を求めている。そういうことではここに、ひとつの考え方が「夫婦関係と親密性」の解釈を通して提示されているのである。

永田夏来氏が提出した博士号請求論文は、以上の諸特徴の評価を踏まえ、博士（人間科学）に値すると審査委員会は判断するに至った。

2003年12月18日

永田夏来氏学位申請論文審査委員会

主査	早稲田大学教授・文学博士（早稲田大学）	濱口晴彦
副査	早稲田大学教授・博士（人間科学）（大阪大学）	根ヶ山光一
副査	早稲田大学教授・博士（人間科学）（早稲田大学）	店田廣文
副査	東京学芸大学助教授	山田昌弘